



本紙日曜朝刊の「中日歌壇」の選者を務める歌人、島田修三さん(74)が14年間担った愛知淑徳大(愛知県長久手市)の学長を、今月末で退く。短歌界で最高位とされる道空賞を受け、万葉集など古代和歌に精通した文学者でもある島田さん。これまでの歩みを振り返りつつ、若者たちに「他人を理解し、自分を理解してもらうには言葉を使う以外あり得ない。言葉をおろそかにせず敏感であってほしい」と呼び掛ける。

(諏訪 慧)

愛知淑徳大学長 退任へ  
歌人・島田修三さん

# 相互理解へ 言葉を大切に



退任を前にインタビューに応じ、運営で意識したことなどを話す島田さん＝愛知県長久手市の愛知淑徳大で

「多数派の利害や常識にとらわれると、少数派への理解不足が生まれる。同情などの情緒的な手段ではなく、隔たりを知的に理解し埋めていこうと考える冷静な姿勢が、違いがある人との間の壁を取り払うのに有効だと信じている」。18日にあった学部ごとの卒業式。島田さんは事前収録の動画でそんな式辞を述べ、最後のメッセージを送った。

昨年は「文学の言葉をはなむけに贈りたい」と語りかけ、詩人谷川俊太郎さんの作品「うそとほん」とを朗読。〈うその中にうそを探すな〉ほんの中にうそを探せ〉という言葉を紹介した。現代は生活に欠かせなくなったスマートフォンなどが多くの情報を与えてくれる一方で、その

中に虚偽が交ざる可能性があると指摘。「人生や職業上の岐路に立って決断を強いられるとき、谷川俊太郎の詩は皆さんを立ち止まらせるくらい力はあるのではないかと訴えた。

コロナ禍を乗り越え

そんな島田さん自身が、文学の言葉に救われてきたという。「一番好きな歌人」は、戦前の歌壇に大きな影響を与えた窪田空穂(1877-1967年)。「人の為には生れずその人をよしとあしきとわが為にいふな」という歌を、「人は他人のために生まれてのではない。他人について善しあしを言うのは、あくまで自分のためにすぎない」と解釈した。「空穂の言葉は

# 飛び交う情報 虚偽見抜く目も

励みになる。人を支えるのはやっぱり言葉ですよ」

学長在任中も歌人として活躍し、歌集を3冊発表した。その中には、大学について詠んだ作品もある。

2020年11月刊行の『秋隣小曲集』に収めた〈どうすりやいのさ思案橋 てなことを口ずさめども口ずさめども〉は、新型コロナウイルスへの対応に苦慮する心情を表現した一首だ。同年に新型コロナウイルスが世界的に大流行し、全国の大学がキャンパスへの立ち入りを禁じた。対面授業ができなくなった大学側は、急きょ授業をオンライン化するなど対応に追われた。

愛知淑徳大も、パソコンや無線通信に必要な機器を学生に貸し出したり、教員にインターネットでの配信を求めたりして、懸命に態勢を整えた。そんな経験を「デジタル機器に不慣れた教員もいたが、乗り越えてくれた」と振り返り、「みな頑張ってくれた。ありがたかった」と感謝の言葉を口にす。

退任直前まで業務が残っているが、4月からは歌人や文学者としての活動が中心になるといふ。「まだ忙しいのでさみしさは感じないけれど、辞めたらさみしいのかもれないね」とほほ笑む。

しまだ・しゅうぞう 1950年、横浜市生まれ。88年に愛知淑徳短期大の助教授になり、愛知淑徳大文化創造学部教授、同学部長、副学長などを経て2011年から学長。同年に歌集『蓬歳(ほづさい) 断想録』で道空賞、21年に「短歌創作と古典文学研究」の功績で中日文化賞。

2025年3月22日(土) 中日新聞 11面より  
この記事は中日新聞社の承諾を得て掲載しています。